

ボイズンベリー（ほふく性キイチゴ類）の系統比較			
【要約】ボイズンベリーのニュージーランド産大粒系統は、高島市安曇川町で従来から栽培されている系統に比べて多収である。また大果で糖度が高く、生食用に適していると考えられる。			
農業技術振興センター 栽培研究部 花き・果樹分場 果樹担当			【実施期間】平成19年度
【部会】農産	【分野】高品質化技術	【予算区分】県単	【成果分類】指導

【背景・ねらい】

高島市の地域特産として定着しつつあるボイズンベリー（ほふく性キイチゴ類）の好適系統を選定するため、ニュージーランドから新たに譲渡された大粒系統の苗木と従来から安曇川町で栽培されている苗木とを同一条件下で栽培し、生産物の収量、品質等を比較検討した。

なお、両者とも品種・系統名が不明であるため、以下前者を「NZ種」、後者を「安曇川種」と仮称する。

【成果の内容・特徴】

NZ種は、安曇川種に比べて1果重が約1.7倍の大果となる（表1，図1）。

NZ種は1樹当たりの収穫果数が少ないが、1果重が大きいことから、収量は安曇川種を10%程度上回る（表1）。

果実品質では、NZ種は糖度が高く食味に優るが、酸度もやや強い。大果で糖度が高いことから、NZ種は生食用に適していると考えられる。

NZ種の収穫期は7月上旬であり、安曇川種よりも10日程度遅い（表1）。

両種とも、生育期間を通じて病害などの大きな問題はなかった。ただし、NZ種では収穫時にやや軟化した果実が散見された。

【成果の活用面・留意点】

NZ種は過熟による軟化傾向が大きく、特に適期収穫を心掛ける必要がある。また、茎にトゲが多いため収穫作業に手袋を要し、作業性はやや劣る。

安曇川種とNZ種とでは、収穫期が10日程度異なることから、両種の組み合わせによって作期の分散を図ることができる。また加工用と生食用など、それぞれの特徴を活かした使い分けを図っていくことが望ましい。

両種の加工適性の差については、今回は調査しておらず不明である。

[具体的データ]

表1 試験樹1本当たりの収量および果実品質

	平均果重 g	縦径 mm	横径 mm	糖度 Brix %	酸度 PH	収量 g	収穫果数 個	収穫期間	収穫盛期
安曇川種	6.5	27.6	21.5	10.3	2.9	594	110	6/19～7/6	6月19日
安曇川種	7.6	29.1	22.7	10.4	3.0	2093	290	6/19～7/6	6月19日
安曇川種	6.1	27.5	20.6	10.5	3.0	2420	465	6/19～7/6	6月22日
安曇川種	6.3	27.9	21.6	10.3	3.0	1538	267	6/19～7/6	6月19日
安曇川種平均	6.7	28.2	21.6	10.4	3.0	2017.0	340.7	6/19～7/6	6月19日
NZ種	11.8	35.4	27.2	12.2	2.8	2917	267	6/28～7/11	7月2日
NZ種	11.6	36.2	26.1	12.2	2.8	2036	213	6/28～7/11	7月2日
NZ種	11.1	35.0	25.7	11.4	2.8	2512	268	6/28～7/11	7月2日
NZ種	11.0	35.0	26.3	11.6	2.9	1498	151	6/28～7/11	6月28日
NZ種平均	11.4	35.4	26.3	11.8	2.8	2240.8	224.8	6/28～7/11	7月2日

安曇川種 は木の生育が劣り、収量が極端に少なかったため、これを除外して平均値を算出した。

(安曇川種 の数値は、果実品質の参考データとして記載)



図1 ポイズンベリーの収穫果
(上段：NZ種 下段：安曇川種)



図2 仕立方法(4月27日撮影)

[その他]

・研究課題名

大課題名：消費者等の多様なニーズに応える高品質・高付加価値化技術の開発

中課題名：安全・安心・高品質な農畜産物の生産技術の開発

小課題名：果樹の高品質で安全な生産技術の確立

・研究担当者名：徳田 寿、 小嶋俊英

・その他特記事項：平成17年度要請課題「滋賀県におけるポイズンベリーの栽培技術の確立」

(高島県事務所農産普及課)